第２回安曇野市まち・ひと・しごと創生総合戦略有識者会議　会議概要

1　審議会名　　第２回安曇野市まち・ひと・しごと創生総合戦略有識者会議
2　日　　時　　平成 27 年８月 11 日　午前 10 時 30 分から正午まで
3　会　　場　　安曇野市役所共用会議室 301
4　出席者　　木村委員、田村委員、栗田委員、松岡委員、川崎委員、馬場委員、石曽根委員、木下委員、宮島委員、浅川委員、伊藤委員、成瀬委員（廣瀬委員代理）、淺川委員
5　市側出席者　小林政策部長、小林政策経営課長補佐、鈴木主査
6　公開・非公開の別　　公開
7　傍聴人　１人　　記者　０人
8　会議概要作成年月日　　平成 27 年８月 21 日

協　議　事　項　等

次第
1　開会
2　会長あいさつ
3　協議
　意見交換「新たな雇用を生みだすには」
　　「若者や女性の移住・定住を図るには」
4　その他
5　閉会

会議
1　開会（田村副会長）　　（10：30）
2　会長あいさつ（木村会長）　　（10：31）
3　協議　　（10：35）

（事務局）まず本日の委員ですが、市の保育園保護者会連絡協議会の会長の廣瀬さんが本日欠席ということですので、同じく副会長の成瀬さんがご出席をいただいております。資料につきましては、安曇野市の移住調査ということで、首都圏の人を対象にしたインターネットアンケート調査、市民対象の定住にかかるアンケート、結婚子育てのアンケート、市内の若者を対象としたアンケート、転入した方、転出した方へのアンケート、このようなアンケートを実施しました。それから、企業のヒアリングということで、安曇野市内の規模の大きな５社に直接お伺いをしまして、ヒアリングをしました。本日は雇用ということですので、長野労働局より発表されました７月 31 日発表の雇用統計の資料を提供いたしました。前回ご指摘をいただきました、年齢階層別の社会移動のグラフにつきまして、男女の比較ができるようにいたしました。以上たくさんの資料をお送りさせていただきましたが、私のほうで細かく説明すると本日の討議の時間がなくなってしまいますので、項目だけ申し上げました。

意見交換　　（10：40）「新たな雇用を生みだすには」

（委員）安曇野市が企業誘致するのではなくて、工場は松本市や塩尻市などの近辺の市に任せ、安曇野市はベッドタウン化してそこに仕事へ通えるように交通網や道路網を整備するということでも人口が増やせるのではないかと思います。テレビ番組で石川県のスーパー公務員について、地域のそこにしかないものを活かすということでそれを題材としたテレビドラマが放送されています。今は北陸３県で、農業の無農薬化について活動をされているそうです。無農薬にすれば海外にも売れるということで、市やＪＡとタイアップして活動されているそうです。安曇野市全体としても、一企業に頼らない、魅力的なことができればいいなと思います。

（会長）まず、キーワードとしてベッドタウン、それから農業ですね。企業誘致に頼らないという話も出ましたが、ご意見いかがですか。

（委員）農業は人に元気にするとか、そういう魅力的な部分もあります。実は昨日、安曇野市の農政課の会議にも出席したところ、農政のほうでも、もともとの農家を維持してやっていくだけではなく、新規就農者を受け入れて、どんどん農業を盛り上げていこうという動きがあります。新規就農者を受け入れながらやっていく。安曇野市は田園産業都市だと市長もおっしゃっていますし、この田園を守っていくためにも、農業で安曇野らしさを活かしながら人口を増やしていくというのがひとつの方法になるのだと思います。

（会長）新規就農の人たちは成功していますか？

（委員）実際に 100 人入って 100 人定着するとはなかなか言えないです。自分が実感しているところだと、従業員を抱えていくというのは相当難しい部分があります。方向性とは矛盾してしまうかもしれませんが、家業でやっていくというのが、たとえ経済が不景気になっても、経営を続けていくという面ではやりやすい体制ではないかと思います。

（会長）農業の問題で言うと、経営を続けていけなければ話になりませんしね。気持ちだけで農業を守るといってもなかなか困難な部分はありますが、安曇野市としては、どうしても農業の部分を外してものを考えるというわけにはいかないですね。

（委員）そのあたりで言えば、ＪＡあづみでも研修場所も作って新規就農者をどんどん独立させるという事業もやっているので、そのあたりも農協さんとうまくタイアップしながら増やしていくということもできるのではないかなと思います。

（会長）はい、ありがとうございます。農業以外ではいかがですか。

（委員）さきほど、介護の話がありましたね。私たちの企業もロボット関係を重視していますが、これからの一番大きな市場は介護になります。介護という観点から多くの需要が考えられます。例えば、パワースーツとか、歩行アシストとかがどんどん出てくると思います。しかしこういうのを受け入れていくところがまだないですね。それから、もう一つ、安曇野のアイデンティティは何なのかということを考えていくべきではないかと思います。それによって地場の産業をどう育てていくか、作っていくか、そしてなんといっても安曇野の文化なんですよね。井口喜源治はじめ清沢冽とかいろいろな人がいるわけです。

（会長）ありがとうございます。文化等のことまで話が広がりましたが、次いかがですか。

（委員）安曇野の良いところは、自然が豊かなところだとアンケート結果等でも出ています。これ逆にみると、僕も若いころはそうだったのですが、自然しかないということで、新しいものを見たいということで東京に出てしまう。安曇野にとって自然が豊かというのは外してはいけない軸足の部分なのですが、ここで働かせるのは結構難しいと思います。農業やりたい人は来てくれますが、やはり若い人は朝８時から夕方５時ぐらいには帰って、給料は 30 万くらいもらって暮らしたいという理想がありますよね。そうなると安曇野は住んでもらうだけで、都会に働きに出てもらう。そういうことが可能な交通手段とかを充実させるほうが現実的なのではないかと思います。今度安曇野で花火大会がありますが、人はすごく来てくれます。ただ、遊びには来てくれますが泊まりません。ピンポイントで遊びには来てくれますが、その他のことには興味がない、そういう人が沢山います。そういう人に広く見てもらえるように、フットワーク軽く動き回ってもらえる環境をつくってもらいたいなと思います。ここは住むところ、お金は他のところで稼いでもらう。

（会長）つまりベッドタウンだということですか。

（委員）そうですね、今は松本のベッドタウンですが、それをもっと広くして関東圏のベッドタウンになればいいのではないかと思います。そのほうが介護の必要な人だけではなく、もっと働き盛りの若い人にも、家も買えるし、子育てもできるよ、という

ことになると思います。

（会長）飯田市あたりがリニアの関係で狙っているところだと思いますね。

（委員）やはりデジタル化がキーワードで、雇用も大きく変わってくる中で、安曇野市の活力という点では、ベンチャー企業をいかに育てるかだと思います。ベンチャーで開発から営業までできる会社ということで狙っている会社は結構あると思います。そういう会社の資金や経営をサポートしながら活力を生み雇用を創出する。雇用という点を見ると、モノづくりではなく商品開発とかそういう部門の人たちが求められるような気がします。私もちょうど縁のある会社に、来年の新規採用について面接とかさせてもらっているのですが、最近はＵターンよりＩターンです。安曇野に魅力があってここで働きたい、前向きでアグレッシブなメンバーが何人かいます。そういう所を切り口にして、産業を大型の誘致より企業の育成を目指していくほうが長期的によいのではと思います。

（会長）他にはいかがですか。

（委員）私は、静岡県の長泉町というところから引っ越してきたのですが、この町は年々人口が増えていく町で、大きな企業も入っているので税金も落としてもらえます。母子の手当ても手厚くて、たぶん子育て世代の人気も全国でナンバーワンだったような気がします。こちら（安曇野）は車がないとどうにもなりませんが、長泉町は公共交通機関が充実していたし、いろいろな面で子育てするにはすごく住みやすい町でした。それで入ってくる人もすごく多かったので、逆にいうと保育園の待機児童もすごく多かったです。結局、まず公共整備から始めるか、それとも住みやすさや行政のフォローから初めて、人が増えてきたから街を整備する話になるかのどちらかです。安曇野市は、確かに自然が豊かとは思いますが、それで終わりで、生活はしやすいかといったら決してそうではないと思います。雪も多くて雪かきもしなければならない。遊びには来てもいいけど、住むのは大変。決して子育て世代に良いというわけではないと思います。自然が多くて子供はのびのびできるのかなという程度。だからベッドタウン化といっても、もっと違うことを考えていかないとベッドタウン化はしないと思います。

（会長）ちなみに、安曇野市に移られた理由は？

（委員）主人の仕事の関係です。

（会長）（アンケートの）なぜ安曇野市に来たのかという質問に対して、仕事の関係、結婚、圧倒的にそこが多くて、「ここが良いから来ました」というのはそんなにあったわけじゃないですよね。やはり、何人かそういう人がいるのは事実だけれども、そこがメインストリームではないですね。前回も出たと思いますが、子育て支援が充実してそこに家を建てて住む、それはいいのだけれども、結局子供たちが大学等で出て行って戻ってこない。松本市のある地区でも、2、30 年前に子育て世代がどんどん新しい家を建てた区画があって、そこが今は高齢化問題でぐちゃぐちゃになっています。だからどうしても若い人を定着させる、ＩターンでもＵターンでもいいので、これをどうにかしないと、いつまでも問題は付きまとうような気がします。

（委員）農業の関係では新規就農、それから後継者問題が大きな問題です。なかなか農家所得があがらない。資材等はすぐに物価を反映して上昇するが、逆にこちらから出す農産物は安値で変わらないのが現状です。東京や大阪に出すと売値は高くなるが経費もかかってしまうので手取りは増えない。だから後継者もつきません。新規就農としては、農業をやりたい人に対して、ＪＡでも生産者の方にお願いして一年間雇っていただいている。生産者の家に入ると、土地もあるし農機具もあるが、新規就農となると土地は自分で確保しなければならないし、農機具も自分で買わなければいけません。最初の投資はかなり必要です。資金の工面も、市やＪＡに補助制度がありますが、ではそれを返済していけるまでに大きくなれるかという問題もあります。自分で農業をやりたいといって来ても、軌道に乗るまでが長い。最初は大きな

農家のところに入って、修行して、自分で独立できるような形ができればいいと思います。雇用としては、農協でも選果場で働く人を毎年 50 人くらい募集するわけですが、季節労働（８月～12 月）ということもあり若い人は少ないです。

（会長）起農しようといって都会から来て農業をやるが、結局うまくいかなくて撤退するという人がすごく増えているみたいですが、その辺はどうですか。

（委員）安曇野市に来ている人はがんばってやっているようです。あまり辞める人は見ない。

（委員）長野市や県でも同様のアンケートをやっているようですが、県・長野市・安曇野市の調査を見ても、どれもあまり中身は変わらない気がします。では安曇野のアイデンティティは何、売りは何なの、ということが議論していく上で参考になるのではないかと思います。それから、隣の松本市でもテレワークやベンチャーへの事務所費の補助制度をつくるというニュースもありましたが、今なかなか大きな企業を誘致するというのは現実的に難しいのでこういうことを考えていくのも一つだと思います。農業にしてもベンチャーにしても、子育て充実にしても、どれか一つに特化するということでは上手くいかないのだと思います。色々なことをやらなければいけないが、その反面すべてのことをできるわけではい。そのあたりの選択と集中という考え方が必要ですね。また、６月の雇用情勢について述べさせていただきます。県内はゆるく改善しており、有効求人倍率は１倍を超えております。数字上はよいのですが、中身を見ると決して褒められません。正規の求人倍率は全国平均に比べても低い、業種によってもデコボコがある、県内全体は今、夏の観光シーズンなので割と期間雇用者の求人がどっと出ていて充足しているが、割と季節労働的な部分が多いのが長野県の特徴です。

（会長）たぶん、非正規雇用が多いというのは、地方だけの問題じゃなく都会も多いのですが、都会ばかりに人が集まってくるということですかね。

（委員）先日、帝国データバンクによる地方創生に係る投資意向調査というのがありました。新しい工場や営業所、本社、物流施設等を設置するにあたって何を重視するか、１位は交通利便性、２位は既存の自社施設の立地状況、３位は用地価格でした。私が思ったのは、既存の会社の拡充、拡張、またそれに関連するものをもってくるというのは、方向性としては、有りなのかなと思いました。奇抜なものは無いですが、既存でしかも雇用力の大きい企業について、さらに増やす余地があるのではないか、増やすために地元でネックになっていることはあるのか、これらをベースに勧奨する手立てを立案し、できることをしていくということです。それから、地元企業で成長したい会社があります。規模を大きくしたい会社、これから伸びていく会社、これらを先ほどの観点で、何らかの形で情報収集しながら重点支援していく、これが現実的方策だと思います。また、安曇野市に転入してくる人は、仕事や結婚という理由が多いという話でしたが、私も実際にそうだと思います。仕事や結婚での転入者（受動的転入）は、先程のような雇用機会を地道に積み上げて、受動的に来る人を増やすしかないと思います。それからいわば能動的転入を増やすためには、どうすればよいか、これは人数はそれほど多くなく、メインストリートではないですが、増やす余地はあるのかなと思います。自然好きには安曇野市は最高だと思います。私個人的には、デザイン関係の人なんかが来ればいいと思う。そういうものに非常に強い関心を持っている人が必ずいると思います。それをネットで情報発信するだけではなく、実際に移住するためのハードルを下げる方策はいろいろあると思います。そんな形で、メインストリートとなる受動的転入はしっかり固めて、ニッチな部分で能動的転入の受け入れについては、「ぜひ安曇野」という人にきちんと訴求して、受け入れていくことです。概念的な話になってしまいましたが、そう考えます。

（委員）ここで、人口をどう維持していくかという観点でみるときに、議論を絞ってみたらどうかと思うのは、仕事があれば人口を維持できるのかということについて、もう

少し考えなければならないと思います。例えば今日のアンケート等を見ても、１６ページに意識調査があって、「働きたい企業がないから」というのがあるが、これは「仕事が無いから」だけではなく、「働きたい企業がないから」ということなんですね。問題だと思ったのは、安曇野らしい産業は何かという問題と、若い人が働きたいと思う産業は何かという問題が、一致していればそれは良いのですが、一致していない部分も結構あると思います。例えば農業は安曇野にとっても日本にとっても大事だと思うのですが、だから若い人が希望するかというとそうではない。安曇野にとって大事な問題と、若い人にとってどこで働きたいかという問題とが、必ずしも一致していなかったと思います。そこでどうするのかということを考える必要があると思います。働きたい企業をどう増やしていくか、あるいは成長盛りの企業をどう伸ばしていくかを考えるのは一つの方法だと思います。もう一つは、若い人の意識を、いままで向いていなかった部分にこれから向けるにはいい方法があるのか、というのを考えてもらいたいと思います。

「若者や女性の移住・定住を図るには」

（会長）それは、次の若い人の定住に繋がるにはというテーマとなっています。私も同じ考えで、問題は二つあると思います。ひとつは、雇用があれば本当に若い人は定着するのかどうかという問題。やはり給料がいくらで、将来ずっとそこで住み続けていけるかとか、そういうことを含めた雇用というものを考えないといけない。実際に中身を見ると、そこでずっと働き続けて、家族を持って、家族全員なんとかやっていける、こういうレベルになっているのか考えると、どうも怪しいです。やはり定住というからには、そこで最後死んで、お墓に入って、子どももそこで育っていって、学校にきちんと入れてやれる、そういう展望がないといけないと思います。そんなところから次の定住という話になってくるのですが。

（委員）大きな企業が人員整理を行ったり、企業が安曇野市に出てきたりとか、そういったことが起因となって人口の増減が起こると思います。そう考えると、人を呼び込むところには、ベンチャー然り、農業然り、人が安心してご飯を食べて、家族を養っていける給料が出せるようなきちんとした会社がある、ということが影響すると思います。大企業、中小零細すべての企業について、社会インフラ、例えば電車・バスは当然ですが、今はインターネットの時代ですので、情報通信網も含めた環境整備がしっかりされないと企業がでてこないと思います。東京の人たちが、安曇野にひょいと遊びに来るだけだということについては、私は来てもらえるだけ華かな、と思います。安曇野は知名度もありますし、魅力もありますし、人が来てくれている状況を考えると、公共インフラの部分を見直すことによって、更に来やすくするのがよいと思います。若者が東京に遊びに行く感覚で、東京で仕事をしている若者が、こちらに遊びに来てくれればよいと思います。インフラを見直すことで、経済の活性化という部分にとっても良いと思います。情報インフラさえ整えば、デザイン会社とか、コールセンター業務をやるような会社は来やすくなるのではと思います。まして、クリエイティブな仕事をするのは東京がベストかと考えると、ちょっと田舎で、疲れた時には山を見ながらほっとできるような場所の方が良い仕事ができるような気がします。こういったところを追求していけば、雇用も、定住も、企業も、いろいろ改善していくのではないでしょうか。

（委員）新規雇用はなかなかすぐには難しいと思います。既存の企業である程度雇用人数を増やしていただかないと難しいと思います。ただし正社員の募集はパート等に比べると非常に少ないです。したがって新たな企業を探しながら、既存の企業で人数を増やしもらうのがよいのではないかと思います。

（会長）これまでの話で行くと、核となる企業は外せない、ただそれだけではどうかなとい

うのがあって、必ずしもここに住まなくても、ここを訪れるだけでも意味がある、広い意味で観光ということになるのでしょうかね。そういう中で重要なのは交通網やインフラの充実になると思います。でもインフラ等になると安曇野市単独は厳しい。各自治体連携をとって、広がりをもって考えないと今後できませんよということになります。観光ひとつ見ても、訪れる人にとっては、松本と安曇野は一体で考えているだろうし、そういう方向が今後求められていくと思います。もう一点は、ある程度人口が減っていくなかで、問題は人口が減ることではなくて、人口の構成だと思います。そこで、若い人たちが定住するかどうかというと、雇用の中身ということになる。そして核になる企業は、製造業だけではなく、いろいろあると思います。今お金を生み出す産業は、かなりサービス産業に移ってきている部分があるので、そのあたりに発想を変えながらやっていく必要があるのではないかと思います。プラス、それだけではなくて、観光という観点もあるのではないかということでした。ただ観光については、それなりに観光客は来るが、それをビジネスにしている人は思った程はいないような気がします。きちんとした働き口を増やす程に観光客が来るわけではないように思います。いかがでしょうか。観光という観点でいうと。

（委員）ふと考えるとこの安曇野市としては、文化的にも安曇野市全体で何かするようなものが無い。安曇野全体でひとつの行事や文化があれば、観光にも向いてくるだろうし、良いと思うのですが。若い人がそれに向けてやるものが少ないので、いかがなものかなと思っています。自然が魅力といっても、長野県の他の市町村から安曇野市に来た時に、同じではないかと思います。何か安曇野市の特色となるものがあればいいと常々思っています。

（副会長）これは直接はあまり関係ないかもしれませんが、私が思うに、昔一時期ブームになった半農半Ｘという、半分百姓やりながら、勤められるよというのが安曇野の文化ような気がします。

（委員）安曇野の美しさを皆がもう少し理解するべきだと思います。それは山並み、スイスでもこれだけ女性的に美しい山並みは無いと私は思っております。しかしながらそれを鑑賞する場所がひとつもない。かならず電信柱が見える。ここが生きていくには将来、観光しかないと思っています。企業がここに来る必然性は殆どございません。したがって、地場の産業をどうするか、それと観光をどうするか。しかも恒久的な観光地にしてリピーターを増やすにはどうするか、それを呼び込むためにはどういう風にしていくかということは、長い目で今から始めて良いのではないかと思います。それには環境を中心としたまちづくりで、まちを良くしながら新しいまちを創造していくやり方が大切ではないかと思います。もうひとつ、不思議なのですが、穂高でも、豊科でも、人々が集えるところがないですね。それをまちとして作る必要があるのではないでしょうか。私は大糸線に乗りながら、豊科の駅の広場をうまく活用したら皆が集まってくるのではないかと思います。穂高の駅の前の広場を行政が再開発すれば皆が集まってくるのではないかと思います。そういう短期的な問題もありますが、安曇野の３０年先を見据えた指針がでることを心から望んでおります。

（会長）観光を念頭においた都市計画ということですね。半農半Ｘにしても、ある企業があって、そこの社員になって、何月から何月までは農業やってくれ、何月から何月までは工場等で働いてもいいと、それを自分で差配して勤め口を探したりとかではなくて、もっと大きな所が差配してできるようなものがあれば可能じゃないかと思いますね。要は個々人がリスクをとるのではなく、組織としてリスクをとるという格好にして、うまく集約していけば可能だと思いますね。それなんか行政が色々なところに目配りして、組織づくりを支援する可能性があるんじゃないですかね。

（委員）2､30 年後を見据えた部分で行くと、今、安曇野市は今年から農家民泊を進めていま

して、都会の中学生や小学生の修学旅行等の受け入れをやっています。受入側としては大変だというイメージがあるのですが、実際受け入れてみると、田んぼに入るだけでもすごく喜んで、長靴用意したけれども履かずに裸足で入ったりして、体験を楽しんでいってくれました。2､30 年後に、修学旅行で行った安曇野に住みたいといったようになるとか、長い目で見て人口増加に繋がっていくのではないかと思います。

（委員）諏訪に御柱のお祭りがありまして、諏訪ケーブルテレビの人に「諏訪はいいよね、御柱があって人がたくさん来るし、皆が夢中になれるお祭りがあっていいね」というと、それは間違っていると言われました。その方が会社に入った 20 年前は、御柱は有名ではなかったそうです。それを、どうやったらお祭りが楽しくなって、地元に対して愛されるお祭りになるか考えながら放送してきたし、応援してきた、それを見た人がお祭りに参加したくなるようにしてきたそうです。安曇野にはいろいろなイベントがありますが、そのなかで御船祭りは、先日文化課で予算が付いて、安曇野の地区にある船をまとめた書籍を作っていたはずです。私は新潟の人間ですが、普通に考えると、なぜ山の中に船があるのだというのが正直な感想です。十分御柱に匹敵する価値があると思います。したがって、地元の人たちが御船祭りが少しでも楽しくなるように、地域のメディアとしてやっています。それから、観光という話ですと、例えば、湯布院、別府、沖縄、四万十、この辺の共通点としては、お土産店や宿泊以外の人からも、「来てくれてありがとうね」と結構言われます。そういう「来てくれてありがとう」という単語を、全く関係なくその辺に歩いているおじさん、おばさんが口にします。観光でこれから生きていくには、安曇野市民の考え方として持っていくべきではないかと思います。例えばイベントで人がたくさん来ると、来てくれてありがとう、それでこの地域が潤っているんだよという意識を皆で持つところから始めれば、20 年後、30 年後も変わってくるのではないかというのが、他の観光地を見て感じたところです。

（会長）ここ１０年ぐらい、松本大学で松本市と連携して市民がホスピタリティをもつということをやっています。見えてきたのは、やればやっただけ市民は観光客と接した時のホスピタリティ精神がアップしていくということです。ただ業界にいる人達がかなり問題があるというのも見えてきました。例えばタクシー運転手は、かなり不評を買っています。観光客を載せても説明もできないし態度も悪いです。こういう所から直していかないと、どんどん観光客は離れていくのですよね。それから、観光での私の個人的な考えですと、日帰り観光から転換して抜け出すやり方を考えないといけないのかなと思います。

（委員）観光は、言い換えると超超短期定住ともいえます。一方で定住があります。その中間に位置する部分には、農家民泊だったり、定住より気軽な「滞在」といったものがあると思います。市民の中にも、離れを貸出ししたい人もいます。今は箱もので宿泊施設をという時代でもないので、空き家を活用したりして、定住と、超超短期定住の間のハードルを下げるというところが一つの方策であると思います。アンケートのなかでも、車を使わないと云々、公共インフラがダメだから云々という意見が盛んに出ていました。これから公共インフラを見直すというのはものすごく大変だと思います。特に、東京から松本までのアクセス等はもう安曇野市でどうにかなる話ではないです。ただし安曇野市の市内だけでも、車がないとどうにもならないという状況は、短期的には難しいにしても、考えるべきだと思います。アメリカでも都市部ですが乗合の配車アプリとか増えていて、そういったものを先進的にやったり、あるいは自動運転車の実験場とか、少し背伸びしてリスクを取って先を行って、移動の利便性を高めていくという方策も活路を見出すのに必要ではないかと思います。

（会長）意見交換はこれで終了です。

４　その他（事務局）
　　合併前の出産祝い金制度については、豊科町と明科町が該当。
　　豊科町は、第三子以降の出産に対して５万円支給、平成１４年度に２７件
　　明科町は第三子以降に対して２０万円支給、平成１４年度に７件
　　次回の日程説明
５　閉会（副会長）

＜終了　12：00＞

以上